

嫌われない 勇気

Kouki Okumura

第一章	出会い……………	4
第一話	人は変わらない	
◆青年の苦悩……………		11
◆人は変わらない 既に変わっているから……………		23
第二章	原因論……………	32
第二話	原因と結果の関係	
◆原因論をひもとく……………		34
◆ターニングポイントは存在しない……………		44
第三章	未来を見通す目……………	53
◆希望を捨てる？……………		55
◆原因は承認欲求……………		75

◆ 社会の嘘から目をそらさない…………… 79

◆ 承認欲求の怖さ…………… 87

第四話 確率論と競争社会

◆ 確率論とは？…………… 98

◆ 競争から降りる…………… 108

第四章 嫌われない勇氣

第五話 青年の決断…………… 120

◆ ここまでを振り返る…………… 123

◆ 「嫌われない勇氣」とは？…………… 139

◆ それも悪くない…………… 151

第一章 出会い

向かい合った学生の目の中にあるのは侮蔑の表情だった。

「こんなことも知らないんだ、図書館司書なのに？」

言わないまでもそう思っているのがありありと伝わってくる。その視線を向けられた青年の心には、困惑と焦り、そして怒りが浮かび上がる。

（わかつているのなら自分で探せばいいのに……）

とはいえ、大学付属図書館の職員として、職務上そんな台詞は言えなかった。

数刻前に現れた学生は、とうの昔の定期試験のために暗記したであろう哲学者の名前を早口で挙げ、本を

探して欲しいと依頼してきた。青年は、哲学は役に立たない学問だと思っていた。実学からは対極にあると。

（なんて役に立たないことに時間を割くんのだ）

青年が学生時代に思っていたこと、それが態度に出たのかもしれない。目当ての本を渡されて帰りかけた学生は、すぐに振り向いてカウンターに戻ってきた。

「あ、次お願いします。○○○○○に関する本で……あれ？　○○○○○だったかな、○○○○○の○○○○○について書かれているものを探したいんですけど」

今度は全く心当たりがない内容だった。

何度も確認しながら目の前のキーボードを叩き検索するが、当てはまる情報が出てこない。学生は決して急かしはしなかった。しかし、なぜだろう。彼の目には落胆と軽蔑が感じられる。

そんな時、目の前のカウンターに本が一冊置かれた。

「これかな？ 探している本は」

第三者の乱入に、学生は頭を掻きながら誤魔化した。

「あ、そうです。これでした。プラトンの『国家』。ど忘れしてましたよ」

ど忘れなんて見え透いた嘘を、と青年は思った。そもそも哲学を学ぶ学生がプラトンを忘れるはずがないというのに。

そこで目線を上げた学生の顔は、一瞬間をおいて一気に青ざめた。

「え……先生、なんでこんなところに……」

先生？ と青年が振り返ると、同じカウンターの内側に初老の男性が立っている。もちろん初対面ではない。青年が二年前にこの図書館で働き始めたときにはもう、臨時職員として在籍していた。週に三回か四回は見かけるが、話をしたことはなかった。

「『国家』は去年ゼミで発表があったねえ」

「あはは……覚えてます。あの、じゃあ、失礼します。ありがとうございました」

一体何が起こったのだろう。ゼミということは、この人はもしかして教授なんだろうか？

青年は疑問に思ったが、老人はそのことには触れなかった。

「たまたま目の前にあった本の内容が聞こえてね。迷惑だったかな？」

「いえ……そんなことは。ありがとうございます。あの、先生なんですか？」

「いやいや、臨時職員だよ」

穏やかに笑つてその人は仕事に戻っていく。

青年はこの出会いに『引つ掛かり』を感じた。一日の業務が終わつて家に帰り、名札の名前で検索してみる。すると、働いている大学の教授であることがわかった。

俄然、興味が湧いた。

哲学に興味が湧いたのではない。あの哲学を学ぶ学生の軽蔑の目線を振り払うことが青年の目的だった。ならばその師である教授をやり込めれば、自分は自分を保てるだろう。

哲学なんてどうせ、何の役にも立たないのだから。

青年は、教授の本を適当に数冊選んで取り寄せることにした。

無論勤務先で借りることはできるが、それはやりたくなかった。

一週間後、届いた荷物を開けると『人は変わらない』というタイトルが目飛び込んできた。心臓を掴まれたような気分になる。

青年は納得できなかった。何故なら青年は変わりたいからだ。己の現状に不満があり、将来に不安を抱えている。ある意味ごく普通の自分。

なのに人は変わらないなどと、何故未来の希望を折ろうとするのか。これが教授であり、人を指導する身で書く本だろうか。

青年は本を軽く読んだ後決意した。

同僚……いや、教授……改め哲学者の元を訪ね、その真意を問ひ質そうと。

そして、自分はこの壁を乗り越えて変わっていこうと。

アポイントを取ると、教授は快く研究室に入れてくれた。

「先日は助けていただきありがとうございました」

まずは挨拶する。

「今日は、敢えて『先生』と呼ばせてください。同僚ではなく一個人として、あなたとお話したいと思いました。先生は大学の教授であることを隠していたんですね。何かしら理由はあると思いますが……でもそんなこと、今日は関係ありません。著作を読ませていただきました。そこでの先生の持論について、今から質問させてください」

青年と対峙した哲学者は静かに頷いた。

これが、青年と哲人の対話の始まりだった。

第一話 人は変わらない

◆青年の苦悩

青年 『人は変わらない』というのが先生の持論ですね。

哲人 そうです。人は変わりません。とはいえ、これについて説明する前に、いくつかあなたに質問したいことがあります。

私を訪ねてきたということは、あなたは今の状況に不満や不安があるということですね。

青年 勿論です！ 今の私の置かれた状況、人間関係や就いている仕事、私生活、もう全部が全部に不満がありますよ。それに、現状に不満もありますが、将来の不安もあります。それは、捉えようもない不安ですし、いつも焦りのようなものを感じています。私はこんな自分を変えたい、変わりたいんです！

哲人 あなたの、その不満や不安。それは、これまで生きてきた年月、その間の無数の選択による結果だとあなたは思っているのでしょうか？

青年 もちろんです。人生の運が悪かったなんていうつもりはありません。私は、私の人生を自分で選択してきました。

幼少期は違いますが、学校に通い始めた頃からは、「今日は勉強するか否か」「誰と遊ぶか」などを決めてきました。もう少し齢を重ねれば「どの学校を目指すのか」「どの部活に入るのか」と。さらに進めば「進学か就職か」「どの業界や会社を目指すのか」「将来の自分」「人生の目標」。これらは、いずれも私自身が決めてきたことです。

そして、かつての選択に誤りがあったのでしょうか。現状に不満を抱えている私となりました。

しかし、言い訳はしません。誰かのせいだとも言いません。私自身が間違えたのだとはっきりと言います。何故なら、これは自分で選んだ結果なのですから。

哲人　そうですか。だから「変わりたい」と言うわけですね。変わることも、あなたの意思であると。

青年　その通りです。なのに『人は変わらない』と先生はおっしゃる。

哲人　では『人は変わらない』というこの私の考えの根本をまずお伝えします。私は、過去の出来事が現在を形成している「原因論」という立場をとっています。

青年　原因論……つまり、過去の出来事が今を決定づけているという話ですね。でも、人はタイムマシンで時を遡って過去を変えることはできませんよね。だから「今」は変えられない。つまり先生は、人というものは過去に縛られて生きていると考えるのですか？

哲人　そうです。

青年 では、今の全ては自業自得だとおっしゃるのですね。ええ、そうです！ 自己責任なのです！ 私の不幸は全て私の能力が足りなかったから、努力が足りなかったから……これに尽きますよ！

哲人 落ち着いてください。確かに先ほど私は「過去の出来事が現在を形成している」と言いました。『人は変われない』というのも、この考えから生まれたのは事実です。

しかし、今のあなたを形成しているのは、物心ついてから現在までの選択だけではないのですよ。

青年 そんなはずは……。私は自分で人生を決めてきました。

哲人 いいえ、あなた自身の意思だけではないのです。生まれてから現在まで、あなた自身が決定したと考えるその選択……実はその数々の選択の影響力は、あなたの想像よりも遥かに小さいでしょう。

青年 私が、私自身の人生を決めてきたわけではないというのですか？ では、私はいま、一体何に囚われ

ているのですか？

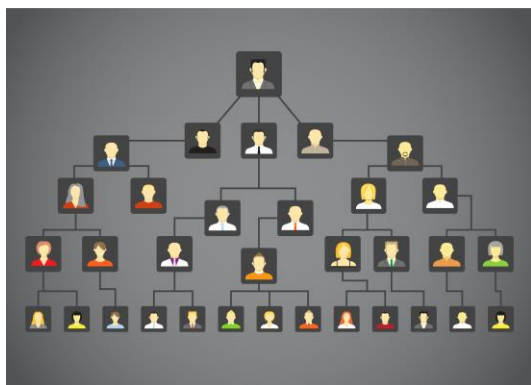
哲人 それは「形質の遺伝」「立場の引き継ぎ」の二つだと私は考えています。

青年 何となくは想像できますが、もちろん納得はしていません。具体的な話を聞きたいですね。

哲人 わかりました。まずは、形質について説明しましょう。形質とは、生物のもつ性質や特徴のことです。あなたは、あなたのお父さん、お母さんから、身長や体格、容姿、IQなど、遺伝子によってありとあらゆる性質や特徴を引き継いでいます。

そして、お父さんお母さんはその両親、あなたから見ればおじいちゃん、おばあちゃんから、形質を遺伝によって引き継いでいます。遡ればもう数え切れない無数の人の形質が、あなたに遺伝という形で引き継がれているわけです。

この遺伝による引き継ぎの連鎖をこんな図で考えてみましょう。



青年 まあ、わかりますよ。遺伝で引き継ぐものがあると言うことは。私の顔も、父に似ていると言われま
すし。

哲人 お父さんだけではなく、おじいさんにも似ているかもしれませんね。つまり、今のあなたが存在して
いるこの瞬間は「永遠に続く線上の一地点」でしかないのです。

また生物学的な形質の遺伝だけでなく、社会的地位や経済状況も引き継ぎが行われています。これが「立
場の引き継ぎ」です。

青年 それは、家の資産や、住んでいる地域などですね。

哲人 そうです。勿論、この「立場」というのは盛えることも廃れることもあります。盛者必衰という言葉
があるように。しかし、社会における立場が血縁で引き継がれているのは厳然たる事実です。

悪く言えば、何世代にもわたって引き継がれた「血の呪縛（形質と立場）」からは決して逃れることはで

きない。

これが、私が『人は変わらない』と説く理由の一つです。

青年 それでは、生まれた時点でその人の人生は決まってしまうという話じゃありませんか。あなたは選民思想の持主だ！

とても、危険な考え方だと思います。現在まで続く人種差別や民族問題、社会問題を引き起こしているのは、あなたのような人間が存在しているからなのでは？

哲人 そう感じるのはもつともです。しかし、現実にも目を向けてください。

たとえば、誰でも東京大学が受験できるように、挑戦する機会は平等に与えられている。一見そう見えるかもしれませんが。でも挑戦してそれが成功する確率、そして挑戦できる幅は、生まれた時点で大部分が決まっているのです。

わかりにくければ、そうですね。人生をトランプゲームに例えてみましょう。

ゲームを始める際は、カードをしつかり切って参加者には同じ枚数のカードが配られますよね。強いカードを予め取っておいたり、自分だけ配られる枚数を増やすことはできますか？

青年 そんなことはできません。それではゲームが成り立ちませんよ。そんなズルをする人がいたら、誰もゲームに参加しないでしょう。

哲人 しかし現実の社会では、ゲームを行う一定のルール（法律）が定められていて、参加者は基本それを守りますよね。そして、その人生というゲームでは、強いカードを予め取っておいたり、自分だけ配られる枚数を増やしておくことは可能なのです。そう思いませんか？

青年 それは……。

哲人 人生における手札の強さとは、形質の遺伝による身体能力、芸術的才能、容姿、身長、IQ、コミュ

ニケーション能力など様々です。その人が生きる社会で評価される才能を持っているかどうか。これが「良いカードを持っているかどうか」という状況にあたります。

そして手札の枚数とは、経済状況、社会的地位、教育環境、出生地、出生国などです。この数は、その人が人生において選択できる幅を決定します。

しかも、この手札の強さや枚数は、生まれた時点で大部分が決まっているわけです。

この厳然たる事実……実はこれを、恵まれている人ほど理解しています。彼らは、手札をさらに強くしたり増やす行動を日々行っています。そしてそれを次世代に引き継いでいるのです。

対して、恵まれていない人程、この事実から目を背ける傾向があります。

青年 うーん。そのお話、全否定はできません。何となくはわかります。

でもそれは本当ですか？ 思い込みって可能性もありますよ。「トンビが鷹を生む」という諺があるように、平凡な家庭から天才が生まれることはあります。丁稚奉公から叩き上げで社長になった自伝だつてよく出版されているでしょう。そういう本が人気なのは、みんな、頑張れば良くなると未来を信じているからな

のでは？

哲人 そうですね。遺伝は絶対ではありません。A↓＼Aにならないこともあります。A↓B、A↓C、A↓Zになることは、確かにあります。それは例外と言えるでしょう。

平均的な身長のお親から超高身長のバスケットボール選手が生まれる例外もあります。いたって普通のサラリーマンの家から一部上場企業の創始者が生まれることもあります。

しかし、例外に目を向けてはいけません。例外は例外なのです。万に一つ……いやもっと少ない一例に過ぎません。

青年 例外だから目立つだけで大部分は違う。つまり、平凡な人間からは平凡な人間しか生まれない、と先生はおっしゃるわけですか。

哲人 あなたはまるで平凡が悪のように言いますが、それは違いますね。ただ、才能という点では、遺伝が

あるのです。運動能力、音楽の才能、IQなど、遺伝的な要因が占める割合は8割以上であるという研究もあります。

事実、歴史に名を遺す運動選手や音楽家、芸術家の大半は親が既にそれに関係する分野で活躍していました。モーツアルトの話は有名ですね。

そういう人たちは、自分の成功は遺伝的要因が大きく関わっていることを知っています。遺伝が知られるようになった現代では、才能がある人は、自然な形で同じ才能や分野で活躍されている人を家族に選んでいます。

これこそ、優生思想や選民思想の実践ではないでしょうか？

青年 先生の考え方は劇薬です……。それでは、私のこれからの人生はもう決まってしまうのですね。努力など無駄なわけですね。

◆人は変わらない 既に変わっているから

哲人 あなたが打ちひしがれるのは無理もないと思います。でもこんなこと、程度の差はあれ実は皆経験しているものです。

たとえば幼少期の夢……スポーツ選手になりたい、音楽家になりたい、アイドルになりたい。その夢を叶える人がどのくらいいるでしょう？

早い人なら物心ついた段階で、遅くても十代前半になれば、その夢が実現できるかできないかを冷静に判断できます。そしてより現実的な夢、いや目標を立てて、その後の人生を歩んでいきます。これもまた、自然なことです。

青年 確かにそうかもしれません。……実は子供の頃の私は、プロのサッカー選手を夢見て、日が暮れるまで毎日練習していました。しかし、ある日の帰り道に突然胸が熱くなりました。

自分はプロのサッカー選手には絶対になれないと、その時わかったのです。

勿論、その後もサッカーを続けていましたよ。でも、あの日の帰り道までの純粋に打ち込む気持ちは戻ってきませんでした。



哲人 つまり良い意味で現実に気付けない、自分を騙し続けられた、そういう人の中の極々一部が、幼少期の夢を実現しているわけですね。

元々は、生まれた時点で人生における可能性や選択の幅は決まっています。つまり、持っている手札の強さや枚数は決まっています。

そして、皆が持っている手札を最大限活用しています。変わろう、向上しようと既に行動しています。

私が『人は変わらない』と説く理由。それは、既に人は変わっているからです。誰もが変わるために既に行動しているからなのです。

青年 誰もが行動している？ それは違いますよ。

哲人 そうですね？ あなたは私を訪ねてきた。それは既にあなたが変化したからに他ならないのでは？

青年 それは……でも……。こういうのは、どうですか？ 私の友人の一人は、昼間は自室に引きこもって

います。もう何年も、いや十年近くになるかもしれません。ただ、完全な引きこもりというわけでもなく、週に数回は日が暮れると外に出て、知り合いと会ったりはしているようです。その知り合いに私が含まれているので、彼の近況を知っているのですが。

学生時代の彼は極めて真面目でした。決して怠惰な男ではありません。しかし、現在の彼は現実から目を背けて、すべてを先送りしているように見えてなりません。

先生の考えでは、彼も変わっていることになります。変わるために行動していると。

哲人 はい、彼は変化しています。変わるために行動していますよ。

誤解があるのですが、変わるというのはあなたが思い浮かべているような、求職センターに行くとか、アルバイトに応募するとか、目に見える行動だけではないのです。

ただ「このままではいけない」「何かしなければ」と考える、これだけでも立派な行動なのです。

青年 それはおかしいですよ。変化というなら、実際の行動が伴わなければ意味はありません。考えるだけ、

そのことに意味はあるでしょうか？ いやありません。

哲人 随分と極端に物事を考える傾向があなたにはありますね。それだから、いまここにいらっしやるのでしようが。

あなたは「考える」だけでは変化ではないという。でも本当にそうでしょうか？

人生の転機……そうですね、「どの部活動に入るか」から始まって「進学するか就職するか」など、今まで色々な決断の機会があったと思います。そのとき、自分の進むべき道を即決できましたか？

大きな買い物をするとき、一人暮らしをする際にどの家に住むのか、あなたが通勤で乗っている車、他にも将来マンションや持ち家を買うかどうか。目の前にした瞬間、頭に思い浮かんだ瞬間に、契約や購入の可否をあなたは決められますか？

青年 そんなことできるはずがないでしょう。みんなそうですよ。どの学校を目指すのか、どの会社を目指すのか、結婚を申し込むのか、離婚するのか、どんな車を買うか、車は買わずに済みますか、持ち家か賃貸か。

みんな悩みます。時には家族や友人、専門家に相談します。しかし、それでもなかなか結論は出ないものです。考えた後に行動する、その行動したときが「変化」なのではありませんか。

哲人 いいえ。もう答えは出ていますが、みんな悩みに悩み抜いてもなかなか結論は出ない、全てはそこに集約されています。

人が実際に行動に移すとき、そのときには、それを大きく上回る葛藤や思惑が存在しているのです。



もう少し身近な例で考えてみましょう。たとえば、今日の昼食は何を食べるか。これはあなたの直近の課題だと思います。あなたがお弁当を持ってきていなければ、何を食べるのかについて、これから悩むでしょうね。それはどのくらいの時間になりますか？

青年 おそらくコンビニか定食かで5分。コンビニや定食屋について、そこでも何を選ぶかで5分程度は悩むでしょう。時間の問題なのですか？

哲人 いいえ、今はいくら長い時間悩んでも、現状維持や先送りが存在しないことをお話ししています。結局あなたは昼食を食べるのです。

そして、何もしない人は決断から逃げているように見えますが、一日一日時間が経つことが既にトリガーなのです。人は年を重ね、そして周りを取り巻く状況も変わっていきます。

自室に引きこもっているあなたの友人もそうでしょう。今は実際の行動には移せていないかもしれせん。しかし、毎日の変化に対応して毎日決断しています。このままではいけないと常に心の片隅に抱えてい

ます。それは一日過ぎたことにより変化した決断なのです。

青年 つまり、誰でも変わろうとして既に行動していると。現状維持だけでもそうだし、現実から目を背けている私自身も含めて……。

哲人 そういうことです。誰もが変わろうと努力しているのです。

青年 私は、既に変化している、ということですか……。ううん、納得できないところ、反論したいところもたくさんあります。しかし、一考に値する点もありました。

哲人 それはよかった。私も、あなたとの対話は有意義な時間でした。あなたと話した私は既に変化した私です。あなたも私も、変われない。それは既に変化した後だからなのですね。

青年 お時間をいただきどうもありがとうございました。今日のところは退散させていただきます。

時間をかけて考えれば、あなたの説に矛盾や疑問点が湧いてくるでしょう。ですから、来週にでもまたお邪魔させていただきます。